国語辞書における連語の扱い

―言語発信力の観点から―

Treatments of Transparent Collocations in Japanese Monolingual Dictionaries
― from the encoding viewpoint ―

大　塚　み　さ
日本語コミュニケーション学科准教授

抄録：

透明度の高い連語の一例として「～を割る」の形式を取る連語を取り上げ、12の小型国語辞書における記述内容を比較対照する。連語の扱いや記述には、辞書の規模や編集方針に加えて、語義記述の形式や記述方法の相違の影響も小さくない。固定度の高い連語は名詞項目の子見出しに立てられる傾向があるが、言語の発信力養成の観点からは、動詞項目の語義欄において解説を伴いつつ具体的使用例に埋め込んで引用されることが効果的である。

Summary：

This paper asks how transparent collocations should be treated in Japanese monolingual dictionaries. The contrastive analysis of the treatment of collocations 'Noun + wo + waru' in twelve dictionaries suggests that the structures and definition of each lemma affect this, as do as the difference in the size and editorial policy of the dictionaries themselves. When the units are to some extent fixed, the collocations are likely to appear in a subentry of the noun. From the standpoint of encoding, however, it would be much more effective to treat these as concrete examples in the verb entry. Supplying annotations after the example works well from both the semantic and phraseological standpoints.

キーワード：国語辞書、連語、慣用連語研究、定義、用例、言語の発信力、コーパス

Key Words：Japanese monolingual dictionaries, collocation, phraseology, definition, example, encoding, corpus

1. はじめに

語の意味分析を行う際には、しばしば語の意味単位の認定基準が問題となる。その一例として、その語の出現環境によってもたらされる意味について、特に連語的な語結合の扱いが問題となることがある。

辞書学的な観点からも、この連語を含めた句類を対象とする phraseology（慣用連語研究[1]）は重要視されている。Dobrovol'skij（2015: 275）も、2015 年 9 月刊行の *International Journal of Lexicography*[2] の特集 'Phraseology and Dictionaries（慣用連語研究と辞書）' の冒頭において phraseology が「目下最も活発に発展しつつある研究分野の一つ」（和訳は筆者）と述べている。Collocation（コロケーション）に関する研究も大変盛んであり、特に英語学習者用英英辞典に関しては、コロケーション情報の提示方法や提示位置を調査した実験的研究（Dziemianko: 2014）なども活発に行われている。

国語辞書における「連語」の扱いについては、国広（1997）がその定義の曖昧さや、実用性の欠如に触れ、「手を抜く」「汗をかく」等の「ゴチック体で別扱いされている」慣用句には、実際には語義欄に吸収されるべき連語が含まれている点を指摘している。また、同氏の執筆による『日本語学研究事典』（2007）の「連語」の項でも、辞書の用例において「語連結」と「連語」とが明確に区別されるべきであると述べている。これらに基づき、大塚（2009）は「頭」「気」を含む句について調査を行い、辞書の規模や編集方針、見出し語の意味特性が影響していることを示した。連語は時に成句と共に子見出し欄などに別扱いして示され、一方で一般用例として扱われる点で不統一さが問題視されるが、辞書によってはパラフレーズ等の注釈が一般の語連結との差を示唆する例もある。この点は母語話者にとっても発信力の養成に有益な情報源と考えられ、改善が望まれる点である。とはいえ、一般の辞書読者は連語と語連結との相違や、これらの句類の下位分類に対してさほど高い関心は抱いていないと考えられる。

欧米の辞書学においても、これら句類の扱いはしばしば問題となる。Bergenholtz and Gouws（2014）は、Multi Word Unit（多重語連結単位、以下 MWU）の下位区分をすべて示すアフリカーンス語辞典の存在に触れ、その句を示すのに適切な語義があれば語義欄で扱われるが、そうでなければ別の語義項目を立てるという編集方針を紹介している。その結果、MWU があたかもその語の特定の多義的な意味であるかのように記載されることになるが、同様の扱いは他の辞書にも見られること、また「見出し語の身分を得られるイディオムとそうでないものがある点についての説明はない（p.4）」と述べている。それらを区別する唯一の方法は意味のパラフレーズを伴うか否かであるという点は、国語辞書の事情にも通じるところがある。

Atkins & Rundell（2008: 167）が固定・半固定句に分類する 6 種類のうち、transparent collocations（透明度の高い連語）は、コーパス中では顕著に見られるがイディオム的意味は持たない句と説明され、その例として *to risk one's life* が挙げられている。そして、句の片方の構成要素を別の語と交換してももう一方の語に意味的な影響を及ぼさないこと、コロケーション全体は単なる要素の合計にすぎないことが示されている。この transparent collocations は本稿で分析対象とする「連語」に相当するものである。筆者がこの単位に着目する理由は、慣用句やこと

わざのように意識的に習得されるものではないが、言語発信力の養成に大きくかかわる存在であると見なされるためである。固定句類に関する術用語の問題は日本語学ならびに言語学においてしばしば問題となるが、以下に本稿で「連語」と呼ぶものはこの「透明度の高い連語」を指すこととする。

Atkins & Rundell（2008: 408-410）は Fillmore（2003: 268）をもとに、encoding dictionary すなわち言語の発信のための辞書が記述すべき内容として以下をあげている。

・正確な意味特徴

・連語的・選択的制限

・社会言語学的特徴（レジスター、地域分布）

・語用論的・内包的（暗示的）意味特徴　話し手の態度

大塚（2014）はこのうちの 4 点目に注目してその可能性を探究し、諸情報の中でも特に、対人コミュニケーションにおいて留意すべき感情表現や含意に関する情報は有用性が高く、複数の辞典が様々な工夫を凝らしてこれを記載している点を確認している。

本稿ではこの 2 点目に注目して、母語話者の言語発信に役立つ情報として辞書における「連語」の扱いを再度考察したい。大塚（2009）では主として名詞が主見出しに立つ場合を調査対象としたが、本稿では動詞の観点から分析を行うことにする。

2. 国語辞書における連語の扱い

2.1 調査対象とする辞典

以下に現行の国語辞書における連語の扱いを調査し、その実態を把握する。連語の扱いには辞書の規模およびその編集方針が影響することはすでに確認している（大塚 2009）が、本稿では言語発信の観点から辞書記述の分析を行うため、その対象を収録語数 10 万語以下の規模の辞書に限定する。

調査対象とする辞書は、中高生以上の一般人を対象とした小型国語辞書 9 点、および中学生用学習辞典 3 点（〈旺標準〉〈三例国〉〈ベネッセ〉）である。いずれも 2010 年以降に刊行された辞書である。

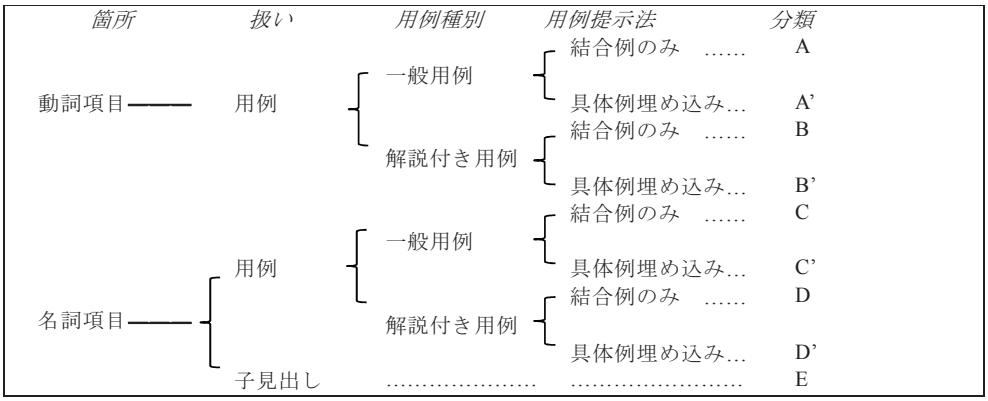
表 1 国語辞書一覧（刊行順）

略　称	辞書名	版	出版年	収録語数	編　者	出版社
三現国	三省堂現代新国語辞典	5	2015．1	約 77,000	小野正弘他	三省堂
学現国	学研現代新国語辞典	5	2015．1	約 75,600	金田一秀穂他	学研
三国	三省堂国語辞典	7	2014．1	約 82,000	市川　孝他	三省堂
旺国	旺文社国語辞典	11	2013．1	約 83,500	山口秋穂他	旺文社
集英社	集英社国語辞典	3	2012.12	約 95,000	森岡健二他	集英社
ベネッセ	ベネッセ新修国語辞典	2	2012．3	約 47,000	中道真木男	ベネッセ
新明解	新明解国語辞典	7	2012．2	約 77,500	柴田　武他	三省堂
三例国	三省堂例解国語辞典	8	2012．1	約 58,000	林　四郎他	三省堂
岩国	岩波国語辞典	7	2011.11	約 65,000	水谷静夫他	岩波書店
旺標準	旺文社標準国語辞典	7	2011.11	約 47,000	古田東朔	旺文社
新選	新選国語辞典	9	2011．1	約 90,320	野村雅昭他	小学館
明鏡	明鏡国語辞典	2	2010.12	約 74,000	北原保雄	大修館

2.2 国語辞書における連語の扱い

以下に、「～を割る」の形式をとる数種の連語を取り上げ、国語辞書における扱いを比較対照する。予備調査を通して調査対象とする連語の候補を選定し、各辞書における記載の頻度が高い順に「口を割る」をはじめとする 6 種を抽出した。図 1 は、これらが辞書において扱われる箇所を詳細に分類したものである。

図 1. 辞書中の連語の扱い



まず、記載項目として動詞項目「割る」と名詞項目（「口」「底」「腹」等）に分けられる。いずれも用例として扱われるが、用例の記述方法は単なる用例（以下、「一般用例」）と括弧等を用いて注釈を示す「解説付き用例」とに分けられる。さらに、その用例の形式によって「～を割る」という結合例をのみ示したものと、具体的な用例に埋め込んだものとに分類できる。なお、名詞項目では子見出しとして扱われる場合もある。以下に各分類の具体例を示す。

(1)〈三国〉（「割る」）「腹を―・割った話がこういうわけで」　…A・A’
(2)〈三現国〉（「割る」）「腹を―（＝うちあける）」　…B
(3)〈新明解〉（「割る」）「〔ざっくばらんに隠すところなく〕話し合う」…B’
(4)〈集英社〉（「俵」）「―を割る」　…C
(5)〈集英社〉（「底」）「―を割って話す」　…C’
(6)〈明鏡〉（「土俵」）「―を割る（＝土俵の外に足が出て負ける）」　…D
(7)〈新選〉（「口」子見出し）―を割る　やっと口を開く。白状する。…E

表 2 は、これを一覧に示したものである。辞書名に下線を付した 3 点は中学生を主たる読者と想定する学習用辞典である。

表２　各辞書における連語「～を割る」の扱い

句		口を～		腹を～		底を～		腰を～		土俵を～		俵を～	
辞書＼項目		動	名	動	名	動	名	動	名	動	名	動	名
階層型	岩国	解		解			子	解		解		解	
	新選	一	子	一	子		子		子	一			子
	学現国		子	一	子		子		子	一	子		
平面羅列型	三国		子	一	子	一	子		子	一	子		子
	新明解	解	解	解	解		解		解	解			
	集英社		子	解	子		一		子	一	子		一
	明鏡	一	子	一	解	一	子	一		一	解		
	旺国	解	子	解	子		子			一			
	三現国	解	子	解	子		子		子	一	解		
	旺標準	解	子	一	子								
	三例国	一	子	一	子					一			
	ベネッセ	解	子	一	子					一			

（略称：「一」…「一般用例」、「解」…「解説付き用例」、「子」…「子見出し」）

一見して分かるように、連語による扱いの違いが明瞭である。「腹を割る」「口を割る」「底を割る」はすべての辞書にいずれかの方法で記載されており、また動詞、名詞双方の項目に記載される。特に「腹を割る」は〈岩波〉を除く全辞書が、動詞項目と名詞項目の双方にこの連語を記載している。一方、「腰を割る」はこれに言及する８点の辞書のうち６点が名詞項目でこれを扱う。意味的に類似した「土俵／俵を割る」は、その扱いもまた類似している。

さらに、辞書による扱いの相違も大きい。例えば、中学生対象の３辞書の記載状況はある程度共通しており、「腰を割る」「俵を割る」には触れていない。〈新選〉〈学現国〉〈三国〉〈明鏡〉〈三例国〉は動詞項目の一般用例と名詞項目の子見出しのどちらか一方、または両方に記載が見られる。

このことは、連語の取り扱いのみにかかわる方針の相違というよりは、辞書中の他の部分に関する編集方針が影響しているとも考えられる。これを次項に見ることにする。

2.3 語義記述形式の相違による影響

倉島（2002：148）は、多義語の記述方式を〈構成〉にかかわる面と〈記述順序〉にかかわる面とに大別し、前者について平面羅列型と階層型の２つをあげている。平面羅列型には小型辞書や初級の辞書が多いと述べられている通り、今回取り上げた小型国語辞書の４分の３は動詞「割る」を平面羅列型で扱っている。以下に辞書の構成面が連語の記述に与える影響を考察しよう。

平面羅列型の〈明鏡〉は、①～⑦で一般的な語義を、⑧～⑫で連語句のみを個別に扱う。

(8) ⑧《「口を―」の形で》隠している悪事などを白状する。「証拠を突きつけられて口を―」

⑨《「腹［胸・心］を―」「底を―」などの形で》心のうちをさらけだす。「腹［胸・心］を―・って話し合う」「底を―・って話す」

⑩《「腰を―」の形で》相撲で、足を開いて膝を曲げ体をまっすぐにのばしたまま腰を低くする。「腰を―・って万全の体勢で寄り切る」

⑪《「手形を―」の形で》手形を割り引く。手形割引をする。「銀行で手形を―・ってもらう」

⑫《「ゴールを―」の形で》サッカーで、相手の守りを抜いてゴールを決める。「ロングシュー

トでゴールを―」　〈明鏡〉

語義の冒頭に《○○の形で》とあるため、視覚的に明確である。名詞項目に置かれた子見出しと比較しても、動詞との意味関係を把握しやすい点に利点がある。しかし、一般語義との関連性が見えにくく、言語の発信力養成という点でやや効果が薄いように思われる。

同様の扱いは、階層型の〈新選〉にも見られる。〈新選〉は、「①一つのものを二つ以上に分ける。」「②開いて内部が見えるようにする。」「③ある境界線からはずれる。」「④液体に他の液体を入れて濃度をうすくする。」の 4 語義に分けた上で、①と②をさらに細分化している。このうち②は以下のように記述されている。

(9) ②開いて内部が見えるようにする。
　ア　包みかくさずに打ち明ける。「腹を割って話し合う」
　イ　こまかに事を分けて言う。「事を割って話す」
　ウ　［「口を割る」の形で］白状する。「犯人がついに口を―」　〈新選〉

関連する用法が一括して扱われていることで、読者にはそれぞれの一文にある条件下（環境）で実現される意味を容易に理解できる。このうち「口を割る」だけがその結合が固定した句として扱われている。

同様に階層型による〈岩波〉は、少し異なったアプローチをとる。

(10)①深いひび・すじを入れるように力を加えて分け離す。
　㋐切ったり、たたいたり、引っ張ったりして分け離す。「薪（まき）を―」
　「りんごを二つに―」「腹を―・って話す」（包み隠さず真意を話す）「口を―」
　（隠していた事を白状する）
　㋑細かに分ける。「事を―・って話す」（内情まで詳しく話す）
　㋒裂け目をつけたり、分け離したりして、完全な姿を失わせる。こわす。裂く。
　「落として茶碗を―」「柱にぶつかって額（ひたい）を―」「会を―・って出る」
　〈岩波〉

〈岩波〉のアプローチは、一般語義との関連性をも保持しており、読者の理解を助けると共に、言語発信面の養成にもプラスに働くと考えられる。

2.4 語義記述方法との関係

最後に、語義記述方法が与える影響についても考察を加えたい。

表 2 においては、用例を一般用例と解説付き用例とに分類して示した。解説付き用例は読者の理解を助ける点で有益であることに加えて、それがいわば free combination（自由結合）による一般用例より一段階結合度の高い連語である点を示唆できる利点がある。それと一般用例とを分

かつのは各辞書の編集方針だけなのであろうか。各辞書の扱いを詳細に分析すると、以下のように語義記述方法が影響している例をみることができる。

(11)〈明鏡〉語義…《「口を―」の形で》隠している悪事などを白状する。
用例…「証拠を突きつけられて口を―」
(12)〈集英社〉語義…(「腹を―」の形で)内部をさらけ出す。打ち明ける。
用例…「腹を割ってざっくばらんに話す」

このように語義記述の中に連語の形式面の情報とそれがもつ意味とを記述することによって、解説を伴わない一般用例でも問題なく読者に情報を伝えることができる。さらにこの手法は、その用例が「口を割る」「土俵を割る」といった単なる結合例を示すのではなく、実際の文脈から切り取られたいわば生きた用例でありうる点にメリットがあると考えられる。これにより読者はその連語のより実際的な使用法を習得することができるため、言語発信面の養成により有意義であると考えられる。もちろん、それがあたかも語義の一つであるかのように扱われる点はデメリットとして把握しておく必要があるだろう。

3. コーパスにおける連語の出現頻度と辞書における扱いとの相関

2章で取り上げた連語は、実際のテキスト中にどのように現れるのだろうか。その頻度情報と辞書における扱いとの間には、何らかの関連が見出されるのだろうか。今後の研究のための予備調査的な極小規模な調査であることを断った上で、連語のテキスト中での出現パターンについて若干の考察を加えたい。

効率性を重視し、まずNLB[3]を用いてコロケーションの様相を把握する。次に目的語(を格)に相当する名詞を、予め設けた分類項目に極力客観的に割り当てる。これは得られた結果を基に名詞を分類すると、自ずとその動詞の語義を想定した分類に陥ってしまうためであり、その背景には当該の連語が出現する文脈をその意味が実現される条件として想定したいという考えがある。抽出された結果のうち、出現頻度3以上のものを調査対象とする。指示語など実際の指示対象を特定できない例や、分類に迷う例も除外する。新奇な用例を収集する必要はないが、「連語」には一般の語結合とは異なる印象や感覚も重要である。これをMIスコア[4]を用いて参照できるかどうか試みる。

語義分類自体はここでの主眼ではないが、意味分類によりグループ化できるものは辞書において一語義としてまとめられる可能性があろう。また、本稿で扱う透明性の高い連語はある程度の要素の交替は認められるが、それを抽出することができるかどうかも検証したい。

以下に、2章で取り上げた連語の様相を見ていく。はじめに身体部位に分類される語をMIスコアの高い順にあげ、2章で取り上げた連語に下線を付して示す。

ケツ(10.67, 頻度3)	<u>腹</u>(9.27, 頻度35)	<u>口</u>(8.01, 頻度56)
尻(7.09, 頻度3)	唇(6.97, 頻度5)	頭(5.64, 頻度13)

「腹」「口」はともに他に比して高頻度である（「腹」頻度 35、「口」頻度 56）。「ケツ」「尻」はどちらも低頻度(3)であり、「～が割れる」のように自動詞を伴った形が辞書に収録されやすい。「ケツ」はさらに文体的な制約があり、ブログを含むとは言え書きことばコーパスでは拾いきれない。もちろん日本語母語話者の言語発信能力養成に必要とはいえないが、理解のために文体情報を付して掲載してもよいであろう。「唇」「頭」は字義通りの用法しか持たないので対象外である。一方、辞書では連語として扱われていた「腰」はここでの条件では抽出できなかった。相撲用語というジャンル特性がかかわっているのかもしれないが、頻度や MI 値だけでは判断材料としては乏しいことがうかがわれる。

次に「線」という共通項でまとめられる語例を見よう。

土俵（11.17, 頻度 7）　　ゴール（8.28, 頻度 5）　　ライン（7.89, 頻度 9）

これらは、辞書中の同一語義のもとに用例として提示されることがある。以下は〈新明解〉の 4 義目「(なにヲ－）（基準となる）境界線を越えて圏外に出る（基準以下の程度になる)」において「土俵を―」に次いであげられた解説付き用例である。

(13)「球がラインを－〔＝球技で、球がコートの外に出る〕」

「ゴールを－〔＝サッカーで、ゴールにボールを蹴り込む〕」〈新明解〉

以上の極小規模な調査からは明確なことは述べられないが、頻度情報に多角的な基準を付加することで、辞書で扱うべき連語の選定基準や辞書での扱いについての何らかの示唆を得られる可能性は否定できないであろう。

4. おわりに

本稿では、透明度の高い連語の一例として「～を割る」の形式を取る数種の連語を取り上げ、その記述方法を 12 の小型国語辞書を用いて比較対照を行った。

連語の記載項目は動詞、名詞あるいは双方の場合があり、名詞項目の小見出しとして扱われる以外はすべて用例として扱われる。用例は括弧を用いて解説を加えられることもある。また単なる語結合の形式提示にとどまらず、より具体的な使用例を示すものもあり、これらは言語の発信力の養成に、より有効であると評価される。

連語の扱いには辞書の規模や編集方針の相違も影響するが、複数の語義を平面羅列して扱うかあるいは階層化して扱うかといった語義記述形式や、連語的意味を語釈に記載するといった語義記述方法の相違も、大きくかかわっている。

さらにコーパス中の連語の出現パターンの考察も、辞書が扱うべき連語の選定や扱い方に関して何らかの示唆を与え得る可能性があろう。

これらをもとに、今後は二言語辞書や電子媒体辞書における連語の扱いも対象に加えて研究を進めたい。

注

1　英語術語の和訳は、主として南出・石川監訳（2009: 310-314）の「術語対照表」に拠る。

2　Euralex（欧州辞書学会）の機関誌である。

3　国立国語研究所が構築した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese: BCCWJ）を検索するために、国語研究所と Lago 言語研究所が共同開発したオンライン検索システム。URL: http://nlb.ninjal.ac.jp/

4　MI（mutual information）スコアは「相互情報量」と呼ばれ、「頻度は低いが特殊な結びつきをしているコロケーションがうまく検出できる」（石川 2008）とされる。

参考文献

Atkins, B. T. Sue and Rundell, Michael (2008) *The Oxford Guide to Practical Lexicography*, New York: Oxford University Press.

Bergenholtz and Gouws (2014) 'A lexicographical perspective on the classification of multiword combinations'. *International Journal of Lexicography*, 27-1, 1–24.

Cowie, A. P. (1998) *Phraseology: Theory, Analysis, and Applications* Oxford: OUP.（邦訳：南出康世・石川慎一郎監訳 2009『連語とコロケーション』くろしお出版）

Dmitrij Dobrovol'skij .(2015) 'Introduction' (to SPECIAL ISSUE: Phraseology and Dictionaries), *International Journal of Lexicography*, 28-3, 275-278.

Dziemianko, Anna (2014) 'On the presentation and placement of collocations in monolingual English learners' dictionaries: insights into encoding and retention', *International Journal of Lexicography*, 27-3, 259-279.

石川 慎一郎（2008）「コロケーションの強度をどう測るか―ダイス係数，t スコア，相互情報量を中心として―」言語処理学会第 14 回大会チュートリアル資料、pp.40-50.

国広哲弥（1997）『理想の国語辞書』大修館書店.

大塚　みさ（2009）「連語とその周辺―国語辞書における扱いを中心に―」『歌子』17、pp. 191-200（横 pp.1-10）.

――――――（2013）「最近の国語辞書の新傾向」『日本語学』32-2、pp.38-47.

――――――（2014）「国語辞典における言語の運用にかかわる情報―その現状との可能性」『実践女子短期大学紀要』35 号、pp.85-94.